

凡例

一、本書は、『うたひ鏡』の目録・奥書を含む全体を翻刻し、それに現代語訳と解説等を加えたものである。

一、本編の全三十条については、研究会のメンバーが個々に担当・執筆した。各条の末尾には担当者の名前を記した。

一、各条の標題は、底本の条ごとの題目に基づくが、わかりやすさを考慮して、漢字表記を改め、送り仮名を施すなどした。

一、各条の記載は、【翻刻】【校異】【現代語訳】【解説】の順序を基本とし、必要に応じて【語釈】を加えた。

【翻刻】

一、『うたひ鏡』を翻刻するにあたり、本書の底本には、高知県立高知城歴史博物館山内文庫所蔵本（以下、高知本と略す）を用いた。

一、翻刻にあたり、上巻は法政大学鴻山文庫所蔵本（鴻山本）と早稲田大学演劇博物館所蔵本（演博本）、下巻は鴻山本と校合した。高知本に本文がない下巻の第二十八条から第三十条については鴻山本を底本として用いた。

一、翻刻にあたっては、底本の忠実な翻刻を原則としているが、レイアウトの都合や通読の便宜を考慮し、以下の

方針に従った。

- 1 漢字と仮名の別、仮名遣い、送り仮名は底本の通りとした。
- 2 漢字の異体字や旧字体は、通行字体や新字体に改めることを原則とした。
- 3 変体仮名は普通の平仮名に改め、平仮名と片仮名の別は底本の通りとした。
- 4 反復記号の「ヽ」「ヾ」「〱」は底本のままとし、漢字の反復記号は「々」に改めた。
- 5 底本にある濁点は、そのまま翻刻し、翻刻者が濁点・半濁点を補うことはしなかった。
- 6 底本にある振り仮名は、そのまま翻刻した。また、底本に振り仮名がない箇所についても、翻刻者が必要と判断した場合は、対校本の振り仮名を（ ）に括って傍記した。
- 7 誤字・当て字は底本の通りとしたが、翻刻者が正しい文字を判断できる場合は「ママ」の後にその文字を、正確な文字の判断が困難な場合は「ママ」のみを、（ ）に括り傍記した。また、誤入した文字がある場合も、同様に「ママ」を（ ）に括って傍記した。なお、衍字は（衍）と傍記し、脱字は正しいと推測される文字を（ ）に括って本文に入れた。
- 8 校合の結果、対校本から脱字・脱文を補う場合は、（ ）に括って本文に挿入した。
- 9 難読文字は□、綴じで見えない箇所は■で示した。
- 10 謡曲・和歌の引用部分などは、「」で括った。
- 11 底本の字下げは、翻刻にも反映させた。
- 12 読みやすさを考慮し、内容に合わせて段落を設け、適宜句読点を施した。なお、句読点を施すにあたり、底本にある句点の位置には必ずしも従わなかった。
- 13 底本にあるミセケチなどの訂正部分は、訂正後の本文のみを翻刻した。ただし、翻刻者が必要と判断する場合は、本文に*を付し、翻刻の末尾に訂正のある旨を注記した。

【校異】

- 一、『うたひ鏡』 上巻は鴻山本と演博本、下巻は鴻山本を対校本として用い、適宜高知本との異同をとった。異同は、以下の方針に従い、【校異】の欄に掲出した。
 - 1 各条の冒頭に、底本と対校本を示した。
 - 2 校異の掲出は、本文の異同箇所番号(①②③…)と傍線を付し、翻刻の次に【校異】として示した。その際、高知本は「高」、鴻山本は「鴻」、演博本は「演」と略した。
 - 3 校異がない場合は、【校異】に「校異なし」と記した。また、対校本がない場合は、【校異】に「対校本なし」と記載した。

【語釈】

- 一、本文の解釈に必要な場合、校異の次に【語釈】の項目を立てた。
- 一、語釈は翻刻本文の出現順に掲載した。

【現代語訳】

- 一、本文の現代語訳を、【語釈】のあとに示した。
- 一、翻刻本文の理解に必要な情報を適宜補いながら現代語訳を作成した。よって翻刻本文には見えない語句や用語も使用した。

【解説】

- 一、翻刻本文に関して考察・検証した内容を、現代語訳のあとに【解説】として示した。
- 一、参考文献の掲出や注の付け方などは、個々の担当者が選択した形式を尊重し、あえて統一はしなかった。

(恵阪 悟・田草川 みずき・長田 あかね)